

木賃宿

娼家ないし、つれこみ宿の「ねどこすまい」あるいは「ねぐらやど」といった、いさか品のよくない特殊なすまいを次々と紹介してきたのは、別に興味本位からではない。「ねぐらやど」は「ねぐらすまい」ときわめて密接な関係があるからである。

都市の最底辺層の最低質の住宅——すまいの型としては「ねぐらすまい」になるが——の集まっているスラム・貧民窟では、住宅はその形式からいうと大部屋に追い込む雑居式のもの、戸別に「ねぐら」が分かれていた「長屋」形式、あるいは「戸別建」といっても、いわゆる一戸建の住宅といったものではなくて、長屋よりもときにはいっそうひどいバラック建の、掘立小屋である場合が多い——といったものに分かれるが、たいていは旅宿と同じく「日家賃」であった。そこに住みつき、時には永住しているといった方がよさそうな人もいるが、住人と住宅とのむすびつきは、旅館的な「しばし」の、あるいは「その日」の仮すまい・「ねぐら

らやど」という形になっている。雑居的なドヤと長屋ないしアパートとは密接な関係を持ち、建物としては必ずしもはっきり区別できないのであるが、雑居的な木賃宿が次第にその中を区切って、アパートないしホテル(?)的なものにつりかかっていく経過もみられる。ここでは追いつきの雑居的な「ねぐらやど」からまずながめてゆきたい。その代表的なものが「木賃宿」である。

元来、大阪では、スラム街には木賃宿よりも長屋が多かったので、横山源之助は『日本の下層社会』で難波・今宮・天王寺などの南、曾根崎・北野・福島などの北、三軒屋などに木賃宿が若干みられただけで一八九五(明28)年に一〇四戸しかないといっているが、東京ではスラム街には木賃宿が多かった。むろん木賃宿にも泊まれず、夏の夜など外の方が涼しいといつて公園のベンチに寝る「宿なし」も多い。しかしそうした人たちの最後にゆきつくところは木賃宿である。一八九八(明31)年一月の調べでは、東京市内の木賃宿の総数は一四五、一カ月の宿泊人員一万二九七四人、一日平均四三二人で(但しこれは帳簿の上だけのことで、実際はもっと多いとみられる。しかしそれにしても、一日当り三人にも満たないのだから、宿といつてもきわめて零細なものであることがわかる)、そのほか名儀は「旅人宿」となっているが、実質上は木賃宿であるものが多いとしている。

もともと木賃宿というのは、全国街道四〇〇五〇の戸数のある村ではどこにもあり、淋しい旅行をする貧困者を宿泊させ、ナベ、ワンなどを貸して自炊をさせる旅人宿のことであった。しかし東京で、「安宿」「安泊」「ヤキ、ドヤ、アンバク、ボクチン」などと称している木賃宿はそれとちがって、日稼人足・人力車夫・車力・縁日商人・下駄なおし・祭文語り・巡礼といった、明治時代のその日稼ぎの下層市民が住居としていたものである。一八九九(明22)年に警視總監三島通庸が市街の「体面」をたもつため、本所花町、業平町、深川の富川町、芝白金猿町、浅草町など数カ所の免許地に二〇〇戸ほどあつめさせた。幸徳秋水「東京の木賃宿」によると、一九〇三(明36)年末の調べでは、宿泊客九、七四六人であったという。

- (1) 横山源之助『日本の下層社会』一八八八(岩波文庫、一九四九・五)。
 (2) 幸徳秋水「東京の木賃宿」、『週刊平民新聞』九〇四・一・一〇・三一。

明治のボクチン

木賃宿は、一戸のすまいを構えることができない「その日暮し」の人びとの「住居」である。横山源之助は木賃宿を「宿泊者は三年四年同じ畳の上を家とし、世間

も義理も、人情も天井も床もなき方一畳もしくは二畳の間にあつめて、破れたる壁に天地を界り永住する」もので、「一戸をかまえることのできぬ細民には木賃宿の畳一帖は簡易な一種の家屋だ」といっている。

日露戦争直前のころの東京の木賃宿の様子を幸徳秋水の記事(一九〇四年)から少し引用してみよう。

「御安宿、御一人前風呂附六銭、八銭、一〇銭、別間は一八銭より二〇銭まで」と書いた長方形の角行灯のかかっている玄関を入ると、正面または横手が帳場である。夕まぐれになってくると客がやってくる。帳場で客の住処・姓名・年齢・職業、前夜の宿泊地などをかきとるのは普通の宿と同じだが、まず「屋根代」つまり宿賃が要求される。先払いである。屋根代は横山源之助の一八九八(明31)年ごろの記録では、場所によりちがうけれど、普通は五銭、中等七銭、上等一〇銭とある。一〇年ほど後の前述の行灯の書きだしでは、少し値上りしている。

そこで後の寝床のとり方は、たいてい「割込み」と称する大部屋に詰めこんで雑居する形式である。ただし「大広間」といってもせいぜい八帖で、六帖、四帖半もあるというから、決して「大」きくはない。定員は普通一人当り一帖、六銭の場合にはフトン一枚、八銭は敷一・掛一、一〇銭は少し上等のフトンで、一二銭になると敷一・掛二が相場である。しかし八五%までの泊まり客は六銭の一枚でカシワモチ式にフトンを体にくるめて寝る。足をのばすと先が出るし、ひざをかかるとフトンが開く。雑居であるから客・住み手はつきつきと入ってくるので、結局ねしづまるのは午前二時ごろになる。朝になってもまだフトンを手ばなさず使っていると、三布フトン一枚一銭五厘、四布五布は二銭の損料が追加されるといふきびしさである。

「大広間」に対して「別間」というのがある。これは区切られたヘヤを借り切るわけだが、その大きさは、二帖または三帖という最小のねぐら空間である。夫婦もの・親子づれなどが借りるのだが、宿というより下等棟割長屋である。屋根代は長期借切りで二帖に四布フトン一枚で一〇銭、敷・掛各一枚で一二銭、三帖に敷・掛二枚で一四銭といった程度である。月にすると二帖で三元、三帖で四元、四帖で四元二銭となり、長屋の一戸を充分借りることのできる家賃だが、この住人たちはまとめて家賃をはらったり、夜具をととのえる余裕のない人たちだから、ミスミス高い住居費を負担せねばならない。スラム街の長屋と同じである。

「別間」の場合には一室に何人いても料金は同じで、三帖のヘヤに五、六、七人といった例もある。タナをつり、ホウキや雑布をかけるところもあり、片すみに



図 22 大部屋の木賃宿・見取図

図 21 山谷の簡易宿泊所・町別分布 1972年7月、浅草・荒川両保健所調、東京都城北福祉センター報告資料による。



よせた食膳のメシの上に湯巻やオシメがひるがえるという最小限空間が、寝室兼食事兼仕事場となる。二〜三年、長いもので八〜九年も住みついているものがあるとのことだった。一九〇三（明36）年の調べでは、木賃宿一戸当りに、この種の家族が平均七世帯すんでいた。しかしナベ・カマ・食器などを自分でそろえているものはせいぜい二〇程度で、たいていは着のみ着のままの無一物である。ナベ・カマ・メシビツ・ゼン・ワンからハシまで入用の時は宿から借りる。したがって朝は大変で、午前三時ごろから七時ごろまでが騒がしくなる家事のラッシュアワーである。「数人の女豪傑の手から手に、一個のすり鉢、車輪とまわれれば、一丁の痘丁電光とひらめきて、目覚しなどいふばかりなし」。

この「別間」はしかし、一泊、二泊となると、一六、一八、二〇、二四銭という風に高くなる。その値段の差はフツンの品柄、室の恰好、畳のよしあし、出入の不便などによるのであるが、これを利用する人たちの中には「つれこみ」「レコづき」、つまりあひびきや売春のための宿泊者が多い。宿の方もこの種の客の方がもうかるので歓迎する。二〇〇戸の木賃宿で一昼夜に八〇〇組から一、二〇〇〜一、三〇〇組が泊まる。このほかに相宿のものとなじんで女房気どりでいる「安宿ごろつき」といわれる二四歳から三〇歳前後の婦人が五、六百人いたという。「ねぐらやど」の性格を端的にあらわしている。

普通の家族生活の場合でも、狭い家の中の過密居住では、さまざまなトラブルがおこる。ましてやこの雑居では、木賃宿でよく起こるトラブルは夫婦ゲンカである。ある深川の木賃宿の一年間の夫婦ゲンカの統計があるが、潜在と一、二泊を通して二、五九三組の夫婦に対して合計五三一件、毎日五人に一人がけんかをしている。内訳は

痴情	一四二件
生活の困難	二九四件
小児の処置	七五件
雑件	二〇件

で、いずれも生活の困窮が根本の原因であることが推察できる。

ところで労働者にとって、疲れをいやし気分をさっぱりさせる「湯」は最も魅力がある。当時二〜三割しかフロがなかった下宿屋にくらべると、木賃宿はフロをもつものが多く、競争のように浴室をもうけて看板に宣伝していたという。ただし毎日たてるといわけではない。一日おき、または三日に一回程度しかわかさぬ。し

かも入浴の順番はヤネ代をはらった順で、一泊六銭の客には「なが湯」ができぬよう、煮えたぎっていても（水道栓があるというわけではなかった）水を入れさせず、またずつと後の番になると火が消えてぬるくなっていても致し方がないという、手のこんだ営業政策がとられていた。

山谷

都市の最底辺層の住民のすまいが集まってつくられるいわゆるスラム（細民窟）は戦後だいぶ様相をかえた。その中で、明治の木賃宿に相当するものは、今日、ドヤ簡易旅館に受け継がれているといえよう。さまざまな寄生的な搾取サービス機構にとりかこまれながら、最低の生物学的生存ギリギリの生活状況の中で、資本主義社会が必要とする「自由」労働者を貯留し集積しておく場として、したがって最低の限界的居住条件を体現する住居の最下限の典型であるという点では、それは昔と変わらぬ。しかし、そこに住む労働者の階層、労働の形態、労働力の管理組織などの変化とともに、住居の形もかなり変わってきている。

現在、いわゆるスラム・不良住宅地区といわれる地域は全国いたるところに見出され、その性格もまたいろいろであるが、上のような意味から注目される代表的なものは、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎のドヤ街であろう。

山谷は一九六〇年七月二六日から一〇日間あまり、その居住民三、〇〇〇人が彼らにとって彼らを抑圧している権力の象徴と感ぜられたマンモス交番を包囲し、三、〇〇〇人の警官が出動するという事件で世をおどろかせた。大阪の釜ヶ崎はそれからちょうど一年あとの六一年八月一日から三日間、一時は一万人の群衆が詰めかけ、その鎮圧に六、〇〇〇人の警官が出動、二億の金がそのために消えたという事件で再び世人の注目をひいた。そこには明治の木賃宿が近代化された「ドヤ」が、そのもともともアクチヴな住民・自由労働者の住居として形成されていた。現代の「ねぐらすまい」の最底辺の一つの型をみきわめるため、これらのドヤを少しながめてみよう。

東京の山谷は浅草日本堤の北東の低湿地で、都電の山谷町と汧橋の停留所があったあたりを中心とした径一kmくらいの地域をさし、東京都内では江東区の高橋地区とともに最大のドヤ街（簡易宿泊旅館街）である。町名変更で台東区清川一〜二、日本堤一〜二、東浅草二の一部から荒川区南千住二〜三となった約九二・三haの広さ。ここに一九六八年現在二・五万から三万人の人が住み、その約一・五万人がドヤすまいとみられていた。

山谷は江戸開府後の埋立地で、徳川幕府の集婚政策により一六五七（明曆3）年に吉原が新吉原に移転した時から「仮宅営業」の地となり、「山谷通い」という言葉があるように集団売春街として成長した。明治の初めごろから木賃宿街としても知られ、一八八七（明20）年の宿屋営業取締規則で市中に散在する木賃宿が整理集中されたとき、山谷はその指定地となった。木賃宿は一人一帖の大部屋雑居と、夫婦連れ、世帯持ちなどの二〜三帖の別間とあるが、後者は売春宿となることもあった。木賃宿は明治維新の変革で発生した大量の失業者が流れこんで雑多な職業に従事する底辺層のすまいであったが、東京が資本主義大都市へ成長するとともに、多くの木賃宿街は自由労働者の集積する場となり、木賃宿にはもうろうろ人夫引きが出没し、寄せ場は人夫請負業がナワ張りをもって人夫をあつめる所となっていた。山谷界隈の街頭労働市場にあつまるものは一九三一（昭6）年には二、五〇〇人となっていた。当時ドヤも約一〇〇軒、労働者相手の食堂が四〇軒、ほかに九軒の「しるこや」もできていた。日傭人夫の最低賃金が一日五〇銭くらいの当時、宿泊費は二五銭、食堂の大盛り并飯三銭、みそ汁二銭、上新香二銭という相場、煙草のばら売りもおこなわれていた。

太平洋戦争でそれらが焼失したあと、上野の地下道にあつまってきた戦災者・浮浪者などを収容する施設として、東京都の尻押しを得て、山谷の焼け跡に五〇張りほどのテント村がつくられた。戦争犠牲者たちは一泊一〇円の宿賃で、一帖につき二、三人が詰めこまれ、シラミの行列を苦にすることもなく毛布を体にまきつけ、折り重なって寝る「ねぐらやど」となった。それらが次第にバラック建にかわり、二、三帖の小さな室をならべた簡易旅館が生れてきた。そのうちのあるものは売春婦でしめられ、一時「準青線地域」の状況を呈していたこともあった。そのうち、「もぐり売春禁止」による警察の取締りがきびしくなり、旅館経営者側も宿泊者の選択制限をやるようになり、個室を少なくするといった建て方の改良（㊟）などで売春婦の宿泊が減り、やがてタナ型のベッド・ハウスが考案されてから、次第に独身男子の「ねぐらやど」を提供するドヤ街として形成されるようになった。

この地区は、隅田川の言問橋西詰から南千住へぬける都電通りの浅草一丁目（山谷）と汧橋の間が中心で、道の東側がほとんどドヤ街、西側に食堂と飲み屋が並んでいる。ここに浅草簡易旅館組合加盟の宿が一九六〇年当時で約一八〇軒、未加入のものを入れると二三〇余あり、そのうちの三割近くをしめる六五軒が三帖の小部

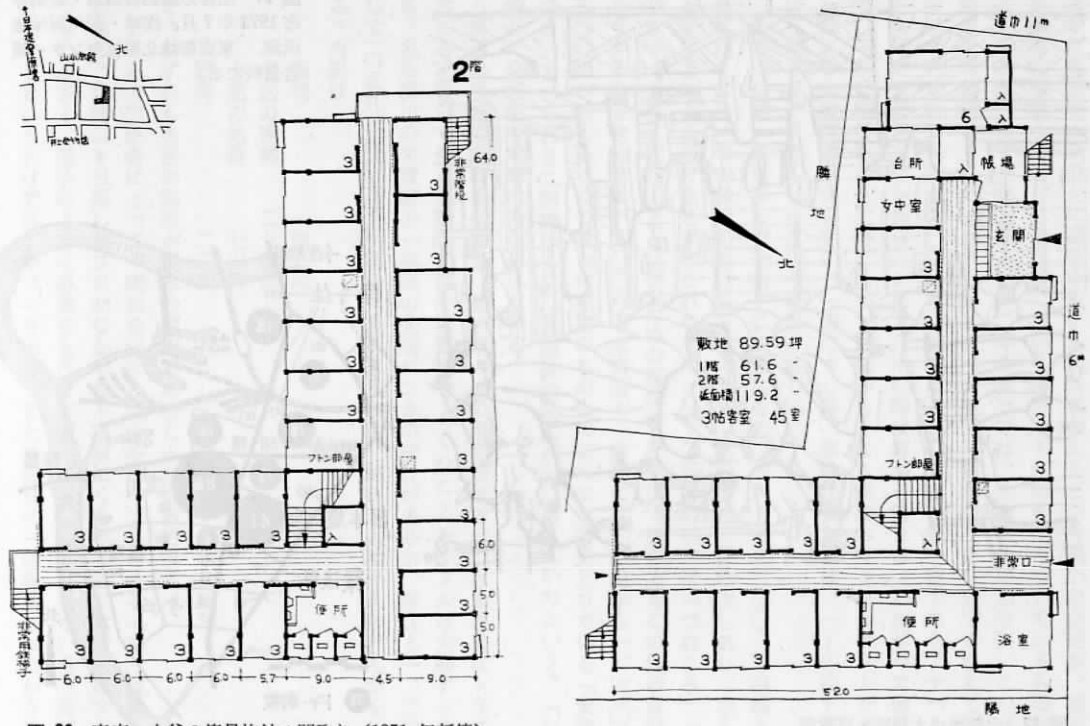


図 23 東京・山谷の簡易旅館の間取り (1951年新築)

われているのに比べると、一帖当り月二、〇〇〇円ないし三、〇〇〇円というのでは
ずいぶん高くつくことになる。貧乏人がよけい生活費を搾取されるという原則はこ
こでも変っていない。こうした小部屋式のドヤは非常に狭く、程度のわるい木賃ア
パート、ただし家賃支払形式が日家賃となっているもの——という風にみると、住
居の形式としては普通の住宅の一つのタイプであるアパートとあまり変わらない。
これに対してドヤ住人の大半をしめる男子単身者は、大部屋式木賃宿の流れをく
むもので、アパートなどは全く変った「ねぐらやど」すまいの形式をとっている
。もと小部屋は戦前の木賃宿の流れをくむ行商人・遊芸人・手職人らの宿泊が多く、
不熟練労働者は大部屋が多かった。一五帖敷といった大きな部屋に追込み式の
ザコ寝で二、三〇人が枕を並べて寝るといいうのもあるが(図22)、四帖から八帖ぐら
いのものを「大部屋」といい、たいていは一人一帖の割でザコ寝をする。これはや
がてもっと効率のよいベッドハウスに改善(?)されてゆくが、ドヤすまいの原型
として注目に値する。

山谷で「個室式」といわれているのは、上に述べた小部屋のこと、現実には
二、三人の共用で迫り込まれる場合が多く、少人数の共用室、つまり小部屋といっ
た方が当たっている。一九五〇年代に入ってから多く建てられた。これに対してベッ
ド式は六三、四年オリピック景気の時代からふえたといわれている。

大部屋式ではめいめい自分の寝ている頭の上に地下タビやゴム長、やぶれた作業
衣やシャツなどをつるすことになる。各人の持ち物は、そう沢山ない。盗難はしょ
っ中おこるので、ものを持たない、特に貴重品は身につけない、というのが原則で
ある。しかし、そうはいっても無一物では生活ができない。そして地下タビやカ
サ・ナガグツ・作業服といった、たいした金目のものではないが手に入れるには少
しまとまった金のいる程度の生活必需品が、かえってよく紛失する。けれどもいく
ら探しても返ってこないことが多いから、騒ぎたてないのが、こうしたドヤ暮らしを
するものエチケットである。また「雑居」であるから、肌がすれあうくらい接近
して生活しているわけだが、それだけに互いに他人にかまったり、他人のことに興
味をもたないようにすることが重要なエチケットとなっている。

大切なものは帳場にあげるか、安く質に入れておくのが確実である。その反
面、金が少しまると、現金でもっているのが不安であるし、貯金といっためんど
うくさいことをする気風はないので、使いみちに困ってつまらぬものを買ってしま
う。そして金に困るとそれを質入れして流してしまうことになる。商店と質

屋を主体とする小商人・サラリーマン相手の旅人専門の簡易旅館であった。残りの
一六五軒がドヤ住人のための宿舎となっているが、この宿舎もまたさらにヘヤの構
造でわけると、二帖ないし三帖くらいの小部屋にわけて一時滞在者や家族もちの住
むドヤ(約九〇軒)と、「ベッドハウス」と称せられている独身者専用のドヤ(約七
五軒)とにわけられた。六八年の調査では簡易宿一九一軒——うち個室式一〇八、
ベッド式七二、個室ベッド併設式八、大部屋式一——となっている。ドヤすまいの
人びとに対する生活施設としては、簡易料理店七、酒店一七、食堂三六、喫茶店一
〇、料理店四、パチンコ屋六、マージャン屋四ができていた。

(1) 底辺の会編『ドヤ——山谷を中心に——』一九六一・一。以下、山谷の叙述はこ
の本によるものが多い。

(2) 神崎清『山谷ドヤ街——一万人の東京無宿——』一九七四・六。

(3) 『朝日新聞』一九六八・八・二三。

小部屋と大部屋

図21は一九五一年に建設されたかなり程度のよい小部屋式のドヤの間取りの一例
である。戦前の木造アパートによく似ているが、ヘヤが三帖と極小の大きさで、押
入が全くないのが異様である。それがドヤ街のアパートの特徴といえよう。採光の
ほとんどない、うすぐらい廊下にヘヤが並んでおり、入口はフスマで、カギはほと
んどかからない。この種のドヤの間仕切りはベニヤ板だけで、物音や話し声はつ
ぬけである。居住者は世帯持ちが多いが、男二人で組んで入っているものもあり、
収入が多いとか荷物があるため一人で一つのヘヤを使っているものもある。昔と同
じく、日家賃であるが、いずれも比較的長期滞在者が多い。

設備は最低で、ドヤは一般旅館とちがって食事を出さないのに、世帯持ちのため
の炊事場といったものがない。自炊をゆるさないのが原則とされている。しかしす
べて外食にたよって費用もかさむので、狭くてきたない仮設台所で住人がゆ
ずりあって炊事をしている例もある。収入が少ないため内職をしているものが多い
が、昼間は電灯がつかぬから廊下や戸外で、また夜も一〇時から一時ごろになる
と消灯となるので、そのあと廊下や玄関さき、時に外の街灯の下で手内職の仕事
をしている人を見かけることもある。ヘヤ代は一九六〇年当時で一五〇〜六〇〇円、
畳一帖二二〇円程度である。三帖のヘヤが多く、一晚三〇〇円、長期滞在の場合は
二〇〇〜二五〇円くらいとられる。アパートの家賃が一月一帖一、〇〇〇円とい

屋に金をもうけさせ、収入として得た金の身につけることができないというの
が、雑居生活の強いいるいま一つの消費生活面での搾取のメカニズムである。

ガランとした大部屋の備品といえば、安っぽいアルミの灰皿くらい、窓には普通
の家とは反対に、家の中にあるフトンが知らぬ間に外に盗み出されぬようスカシ板
がはってある。単なる同宿ということ、雑居生活には別にきびしいオキテといっ
たものはない。ただやはり先輩は奥の方に寝、新入りは入口近くに寝る。これは無
論事なる地位(?)の表示ではない。入口近くに寝るものは、一晩中アタマの上を
またがれるし、ね方によっては足で蹴とばされたり、同宿ものの放屁を頭からぶ
かぶるといふことになるかもしれない。むろん夜中は電灯はつけっぱなしである。
それでも平気で寝られるようになっていねばならない。とはいっても、特にむし
むし不快指数のあがる湿気の高い盛夏は、ノミ・ナンキン虫の攻撃がきつくて余
程の練達者でもねぐるしくなる。そのいらだたしさはもとで、夜中に喧嘩がおこる
ことが多い。ニュースに大きく報導されてドヤというものの存在を大きく人びとに
つきつけた再三の歴史的な騒動がむし暑さの絶頂である八月はじめにおこったの
は、こういうことと無関係ではない。

ベッド・ハウス

大部屋式・雑居型の最も原始的な形式は、まったく一面の大部屋のまん中に吹き
ぬきの階段のついた二階建てが多い。板張りの床の上にチョークで番号が書いてあ
る。帳場で宿賃をはらうと番号を示される。ヘヤのすみに積まれている畳を一枚か
ついできて自分の番号のところにおく。そのつぎに一組のフトンを運んできてそこ
に敷く——という形式のものであった。しかしこれでは、いかにただ「ねどこ」空
間さえあればいいといっても、めいめいの占有空間は心理的にきわめて不安定であ
る。一九五〇年ごろは一泊三〇円でこの形式のものがまだかなりあったが、それよ
りも寝る場所がハッキリし、立体的につめこんで効率的かつ機能的なベッド式が生
まれてきた。

これは、ちょうど一人の人間が寝る長さ二つと廊下にあてる空間の幅をもつヘ
ヤのまん中に細い廊下をとおし、その両側にたいは上下二段、かいて柵のような
床をつくり、廊下側に足をむけて一人一帖の割で寝床がならべられるようになって
いる。中二階がつくられるので空間利用の効率はぐっと高くなる。各人の荷物はそ
の寝床の上の方につくったタナにおく。新米だ、新入りだといって古参の足もとに

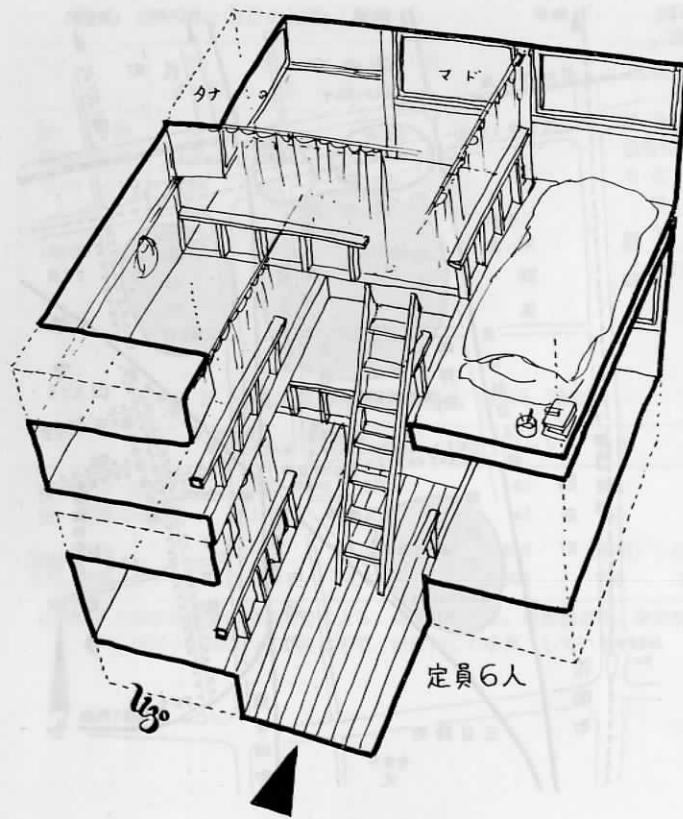


図 25 江東区高橋のドヤ、独立
ベッド式、定員6人(同前)

大阪の釜ヶ崎
夜逃げにはまず「釜がさき」、あるいは質屋から請け出すのにも「釜がさき」という言葉が地名になったという珍説があるけれど、大阪の釜ヶ崎は本当は古くからある字名で、大阪南部の繁華街・浪速区南、国鉄環状線をこえた西成区東・西両入舟町一帯を中心とする区域の俗称である。明治のころ、長町(名護町) あるいは

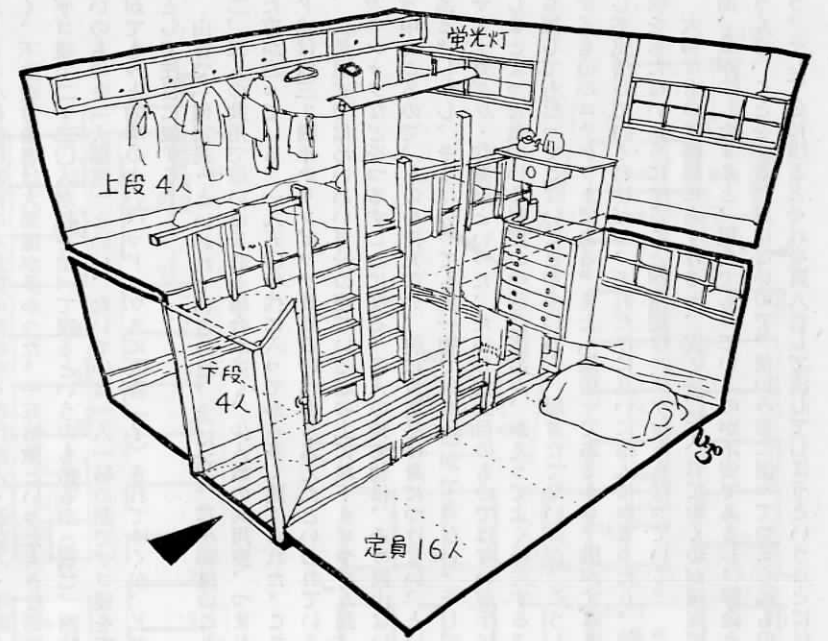
で、そのうち三、〇〇〇人がいわゆる「たちんぼ」といわれる人たちである。その就労先は建設業が五五%で圧倒的、運輸一四%、製造その他三一%という。大部屋式のドヤの居住形式のちにみる建設労働者の「飯場」とおどろくほどよく似通っているが、居住者の労働生活の面でも補完的關係にあるということが、注目される。

- (1) 前出『山谷ドヤ街』による。江口英一・西岡幸泰・加藤佑治編著『山谷』一九七九・六では、同じ頃の調査であるが軒数・宿泊料が若干こととなっている。
- | | |
|-------|---------|
| 職安利用者 | 二、六〇〇人 |
| 臨時労働者 | 二、五〇〇人 |
| 常備労働者 | 三、一〇〇人 |
| 日傭労働者 | 二、〇〇〇人 |
| 自営など | 一、一〇〇人 |
| その他 | 一、七〇〇人 |
| 計 | 一三、〇〇〇人 |

なく、衣類は「着たきりすずめ」で使い捨て、内職や接客は許されず、社交は街頭か公園、金のいる喫茶店でしかできぬ。炊事の設備のある所もあるがせいぜい補食程度で、食事は原則として食堂・居酒屋・街頭の軽飲食施設などでとらねばならない。そこに家族生活から見放された単身者が集積されて住む。これはすまいに必要な条件を多く欠落した「ねどこ」の集積であり、睡眠と外気からの保温だけが可能にする「ねぐら」にすぎない。しかもその「居住者」は、一〇年住みついていても住民として認められず、登録もされず、選挙権もなく無権利・無保障の住所不定の浮浪人・「無宿者」の扱いを受けることになっている。

六〇年当時の旅館組合の調査によると、宿泊者の年齢は二一歳から六〇歳までの壮年労働人口が圧倒的で、日傭労働者が多く、その働き場は建設工事・港湾などであった。ドヤ街がそうした労働力の補給地になっていたことがわかる。

図 24 東京江東区・高橋ドヤ街の大部屋・ベッド形式(荒井勝伴ほか「開かれた環境—都市の中の場の問題」、『近代建築』1971.9より作画)



寝なくともよい。平等である。各人の寝床の両方は隣りに接していても、一応安定感がある。一段に三人ないし四人くらい、一室に二一〜一六人程度というものが多し。しかし全体は開放的で、売春取締りの対象にはならない。経営者の方も有利だし、宿泊人の方もこの方をより好むので、次第にこの形式がふえてきた。このベッド・ハウス式で大体一泊七〇〜九〇円(一九六〇年当時)であった。

たいていのドヤは、やはり生活革新のあふりをうけてテレビがおいてあるし、すぐ汚れる小さな家族風呂程度のものであるがタイル張りの風呂があり、フトンも八〇円以上になるとシートがつき、冬はカケブトン一枚がふえる。しかし六〇円以下では夏冬とも上下一枚、シートなしの万年床、風呂もないといった状態で、金の値打ちが変わって値段が上がっただけである。そこには人間関係の近代化・個人主義化を反映する就寝形式の若干の近代化がみられるが、明治の木賃宿とほとんど変わらぬ体質が引きつがれていることがわかる。

一九七一(昭四六)年の東京都内簡易宿泊所は五五〇軒、宿泊人員三・四万人であったが、山谷は二一四軒で、その三九%、宿泊人員では四八%をしめていた。

七二(昭四七)年七月現在、山谷地域の宿泊所と宿泊料は大体、次の通り

- | | | |
|-----------------------------------|-------------|-----------------------|
| A 三帖程度の個室を中心としたドヤ | 一四三軒 | 一泊三〇〇〜一、〇〇〇円(平均五〇〇円)。 |
| B ベッド・ハウス(男子単身者用、三帖の間二段で四人、六帖で八人) | 五〇軒 | 一泊二五〇円〜三〇〇円。 |
| C 個室とベッド併用 | 一八軒 | |
| D 大部屋(戦争直後のテント村の名残り、追込み式) | 一軒、畳一帖一〇〇円。 | |

合計二一三軒の収容定員は七三年一月現在二万五、六二二人(但し浅草保健所管内では三帖の定員を三人、荒川管内では一人と計算している。若干の誤差がある)となっている。しかし現実の宿泊人員は一九六五年末の一萬二、七五八人をピークに減少し、七一年末では八、六八二人となっている。

ドヤ(簡易宿泊所)は、アパートや一般のすまいとちがって宿泊施設であるから日家賃であるが、そういうことのほかに、宿泊時間が午後三〜五時から、翌朝の九〜一二時までとなっている。これはドヤがドヤモン(客人)によって占拠されることを怖れる経営者側が作り出した原則であるが、長期滞在者でもこの時間になると必ず外へ追い出される。

門限は一〇〜一一時で、消灯のため電化器具はつかえない。洗濯もの干し場も

表 4 釜ヶ崎と山谷の比較 (1951年)

	軒数		宿泊人員	
	釜ヶ崎	山谷	釜ヶ崎	山谷
旅館	69	5	700	75
簡易宿泊所	175	190	15,000	11,000
アパート	199	81	10,000	4,000
計	443	276	25,700	15,075

(備考) 大阪府警調。

表 3 家族型別・宿泊施設 (1967年)

家族型	1戸建屋		簡易宿	その他	計
	長	アパート			
単身者	17	57	216	39	329
世帯持ち	159	140	92	89	480
その他	37	21	18	22	98
計	213	218	326	150	907
%	12・11	24	36	17	100

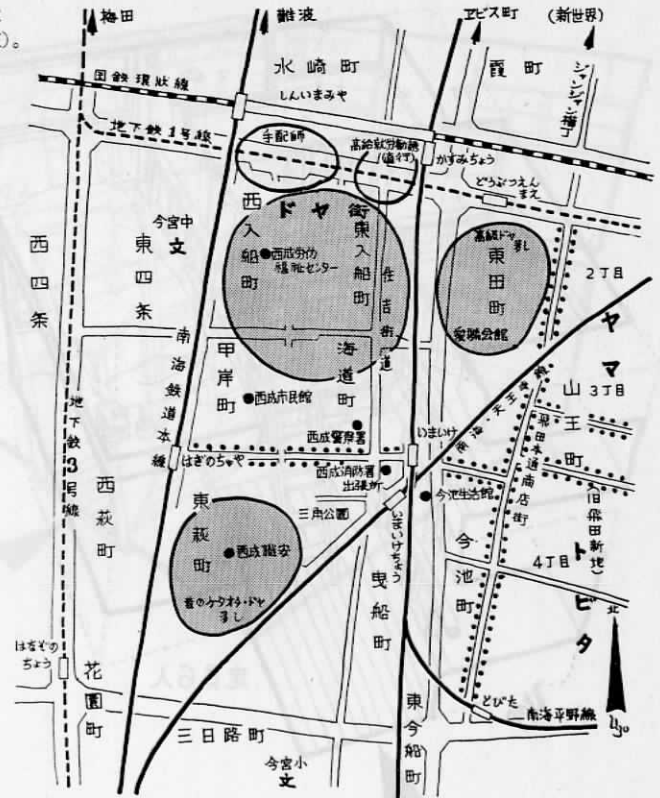
(備考) 大阪社会学研究会『愛隣地区総合実態調査報告』による。

表 5 愛隣地区の宿泊所の変化 (1970, 78年)

	簡易宿泊所		一般アパート		日払アパート		旅館	合計
	軒数	収容力	軒数	収容力	軒数	収容力		
軒数	1970 (昭45)	221	282	46	46	595		
	1978 (昭53)	192	255	43	31	521		
収容力	1970	21,613	10,436	2,852	(不明)	(34,901)		
	1978	17,792	4,829	2,206	710	25,537		

(備考) 大阪府西成警察署の調査による。毎年12月現在。収容能力は、実宿泊ではない。1970年の旅館の収容力は不明、総計はこれを算入していない。

図 26 釜ヶ崎附近地図、両側に黒店のある道は商店街、ハーフ・トーンはドヤ街 (1969年現在)。



は下寺町・日東町あたりの伝統的なスラム街から、大阪の南へ通ずる住吉街道ぞいにおしだされてきた貧民と、南部周辺農村から入ってきた出稼ぎの貧民などが住みついたところで、一八九八(明治三十一)年の大阪府の取締令で追い出された市内数軒の木賃宿が田んぼの中に家を建てたのが始まりだといふ。一八九五(明治二十八)年に東田町にマッチ工場ができ、労働者長屋がならび、のちに市営の共同食堂・共同宿泊所などもつくられたが、資本主義大都市成長の一環として木賃宿もみるみるふえて、明治末期には三〇軒になり、第一次世界戦争直後の大正七、八年には四九軒となつて、裏通りに一、九〇〇戸のあばらやが建ちならび、六、〇〇〇人がドン底生活をしてきたといふ。一九二五(大正十四)年に今宮村は大阪市に編入され入船町となつたが、日中戦争がはじまった一九三七(昭和十二)年には、今宮のスラムに簡易旅館六四軒、そのほかホテル・旅館一七軒となつており、ドヤの宿泊者は五、七三四人(ほかに青カン二〇〇人ほど)、ヘヤは三帖程度のものが多く、一人当り二〇銭(借切りの場合五〇銭)の宿泊料で、そこに何人かを泊まらせていたといふ(郡昇作『日本の玄関・釜ヶ崎』)。太平洋戦争に突入する直前の一九四〇(昭和十五)年には木賃宿は六八軒にふえていた。この間一九一八(大正七)年にこの附近に飛田遊廓が開設された。当初七軒、娼妓三〇〇人程度であったものが、二五年には二六八軒、一、九五七人となり、新世界につづく大御堂街となつて飛田本通り商店街も形成された。その裏通り・隣接地という条件も加わり、一坪一戸の掘立四軒長屋で日家賃をとるといった細民住宅に、日傭い人夫・下駄なおし・露天商人・大道芸人・紙屑買などの都市細民が住みつき、「ルンペン・シラミ・犬車・フグ中世」などと結びついたスラム地区が形成された。戦災で一時壊滅したが、戦後は旅館法が改正され、「簡易宿所」と改名された木賃宿がさらにふえて二〇〇軒をこえ、その立地範囲も宿営業制限がなくなったので入船町から周辺に大きくひろがり、国鉄線をこえてエビス町方面にもみられるようになった(図26)。

この地区の住人は一九六〇年現在で約三・五万人、日傭労働者が六・七割をしめ、定着商店・一般住民は二・三割、一割たらずの寄生的アウトローたちといった構成をもつといわれた。戦後の人口は一九五五(昭和三十)年ごろまではわりゆるやかな増加であったのに、その後の高度経済成長を反映して、一人世帯・単身者を中心として急激にふえ、一ha当り七〇〇人という過密状態にまでなつてしまつた。世帯人員でみると世帯総数の四〇%が一人世帯、二人世帯までで六〇%をしめるという特異な構成をもち、その八五・九〇%が戦後の来住といふ、つまり経済成長の波にのつて資本の要求する建設・運輸・港湾等の下請・単身・自由労働者の集積地・貯水池となつてきたことをしめしている。そして職安とヤミ手配師を通じて、日傭・臨時工・社外工・人夫など約一万人が当時この地区から供給されていたのである。

釜ヶ崎のドヤ

一九六七年八月に社会学研究会のおこなつた九〇八人の抽出調査によると表3のようにその住人にはドヤすまいの単身者が大きな比重をしめることがわかる。ここにあつまつている底辺労働者のすまいの形式は、大まかにいって簡易宿所(ドヤ)、簡易アパート、仮小屋・バラック住宅の三つにわけられるが、一九五一年八月の大阪府警の調査では、一般住宅をのぞいて表4のようになつてゐる。このうちの簡易宿泊所(ドヤ)が往年の木賃宿の伝統をうけつづつもので、山谷に比較するとドヤの規模(一軒当り宿泊人員)がやや大きいことが目につく。

大阪では元来こうした木賃宿形式よりも、粗末な長屋ないしバラックに住む世帯持ちの住民の方が細民街に多いのであったが、高度成長期に入つてから農村の崩壊によつてかり出された単身労働者の集積がこのような状況をうみだして、ドヤ街の形成をもたらし、ドヤの形式は山谷の場合よりものちにみるように、近代化がよりすすんでいたようにみえる。なお、ドヤに住んでいる、いわゆるドヤモンは大半が単身・肉体労働者で、そのほかの二割がまじめな世帯持ち、一割が表向きは無職で、割にぜいたくな暮しをしている寄生搾取組織になつてゐるものとなつていて、昔の木賃宿に三割ちかくみられた身心障害や老齢などによる社会的落伍層は戦後は少なくなり、一割程度にすぎないといわれる。ドヤ街が高度経済成長に奉仕する労働力の貯水池的な補給源としての性格を強めてきたことをしめしている。

釜ヶ崎(公式には愛隣地区)は万国博前後の建設ブームで大きくふくれ上るが、その後の宿泊施設の動向を一九七〇年と七八年について示してみると表5のようになつてゐる。さきの五一年の調査と比べ合わせると、旅館は減少(収容人員はあまり減っていない)の傾向があるが、簡易宿泊所、アパート(一般及び日払い)は共に七〇年には増大し、旅館をのぞいて収容能力三・五万人にふくれ上つてゐる。その後、高度経済成長のストップと建設事業の沈滞を反映して減少し、七八年は旅館の七一〇人を加えても、収容能力は二・六万人、七〇年の七割程度に下がつてゐる。盛衰の甚しいものであることがわかる。

(1) 大阪社会学研究会『愛隣地区総合実態調査報告』一九六八・四。

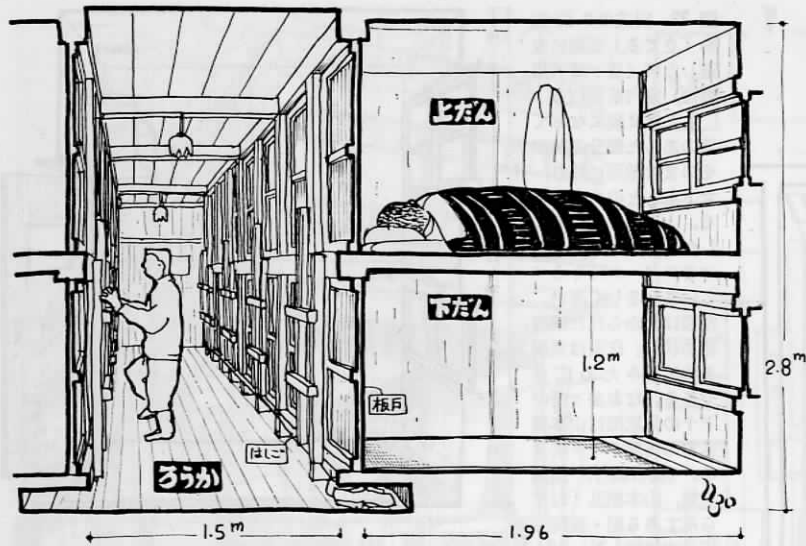


図 29 2段ハコ型個室

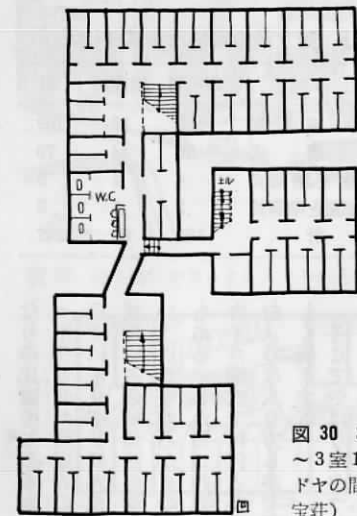


図 30 3~4.5帖の室を2~3室1組に模様替えしたドヤの間取り(釜ヶ崎・大宝荘)

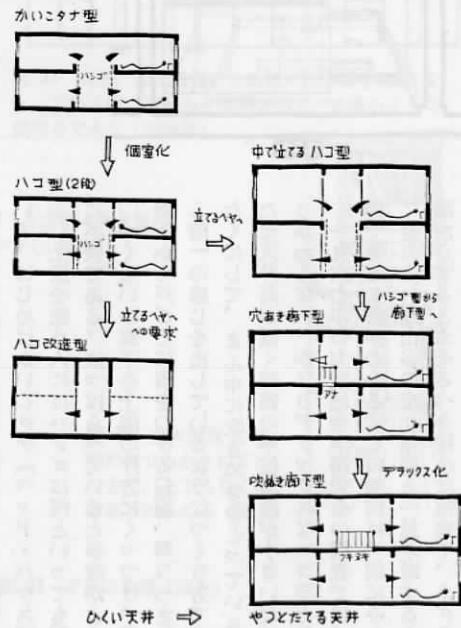


図 28 釜ヶ崎のドヤ断面の発展変化の図式

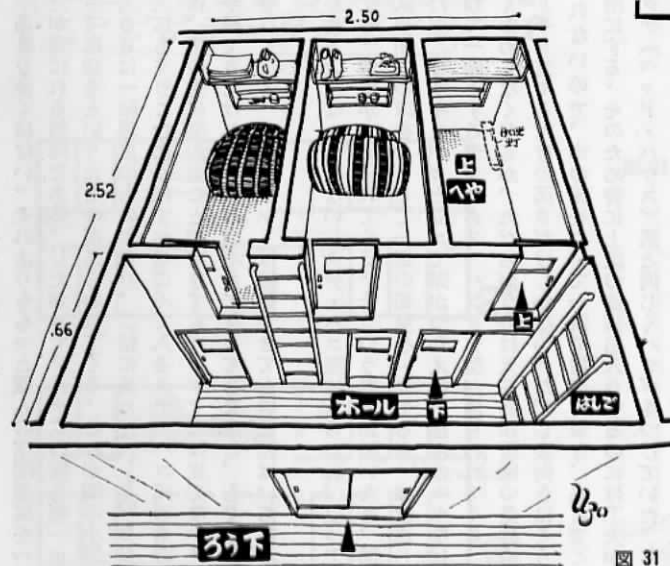
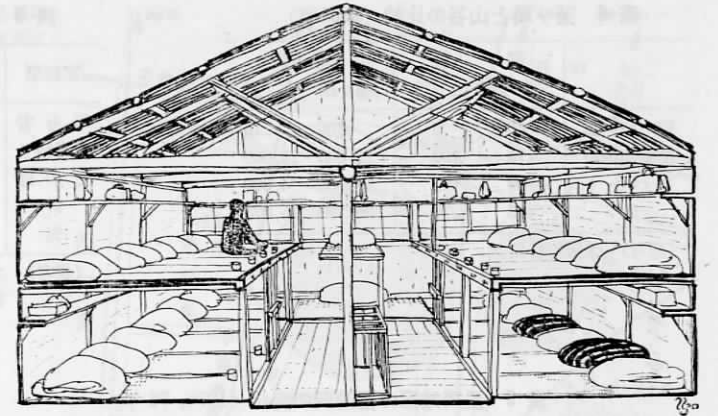


図 31 デラックスな2段型ドヤ(鉄筋コンクリート)

図 27 かいこ棚式ベッド・ハウス



ネグラー個室
簡易宿泊所のほかに、この地区では三階建て程度で天井が低く、狭い廊下の両側に二帖くらいの小さなヘヤがならぶ日家賃の簡易アパート(二世帯当り面積平均二・二帖、一人当り〇・八帖)や、権利金を支払い、家賃は月払いの三帖一間くらいのバラック住宅がある。これらは古いスラム街の棟割長屋の伝統につながるものであるが、他方ドヤとの境界がはっきりしない存在でもある。それらすべてがこの地区にあつまってくる雑多な人びとの「ねぐらやど」(宿所)を提供していることになる。しかしその最も現代的な典型はいわゆるドヤであろう。それを少しく整理してながめてみよう。

もともとドヤは旅館業法で取り締まられているが、罰則がない。旅館・ホテル・宿のいずれにもあてはまらないので、「簡易宿所」とされている。これは元来「山小屋」などを規定したもので、条項は少ない。ただ客室は三帖以上としなければならぬこととなっているが、建築申請の書類は三帖の室になっていても実際は一帖程度の小間に分割する。よくおこなわれる分割法は平面を三つに区切る方法、二段にして三帖二室、あるいは両側に二段のベッド・ルーム四つという方法である。このようにして、たとえば三階建を事実上六階建にすることもよくおこなわれる。

ドヤは簡易宿所にはいろいろの形式があり、さきに「山谷」の項でもふれたが、釜ヶ崎に現実に存在するドヤの代表的なものをしめすと、

(1) 大部屋式——一〇帖ないし二〇帖敷きの並等船室のようなダダっ広い大部屋に迫込み式で幾人もつめこむもの

(2) 棚ベッド式——山谷のベッド・ハウスとよく似た、二段に棚をおいて、それがベッドとなり、幾列もならんでいる形式

(3) 小間式(個室式)——一室一・五帖ないし三帖くらい。三帖で定員二名が普通だが、二帖で二人の相部屋もある。一人当り一・〇帖ないし一・五帖くらいになる。

一九五八年ごろの調べでは(1)が一人当り一晚四〇〜五〇円、(2)で八〇〜一〇〇円、(3)は一〇〇〜一八〇円、一人べやで一五〇〜二〇〇円が相場だった。

(1)は最も原始的な雑魚寝形式のもので、宿泊料も一番やすいが、これは山谷の場合と同じく古い形となり、次第に少なくなりつつある。

(2)は山谷では圧倒的なもので、釜ヶ崎でも最近ふえており、収容力からいうと



図 37 釜ヶ崎のデラックス・ドヤの外観

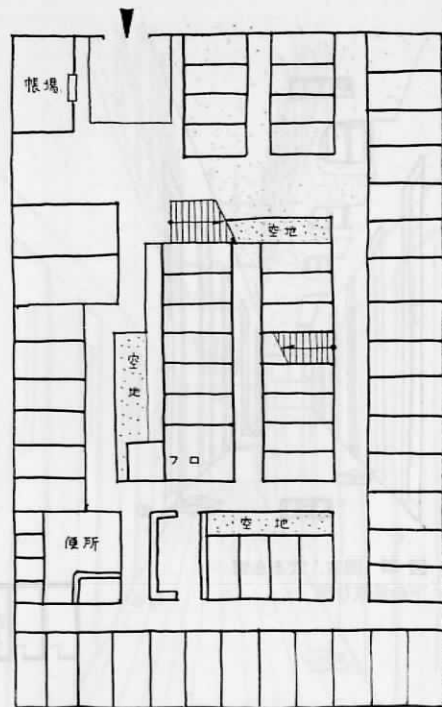


図 33 同前、採光通風のため処々に中庭(光庭)をとっているが、ほとんど密閉空間で、迷路のような間取りである(福寿園)。

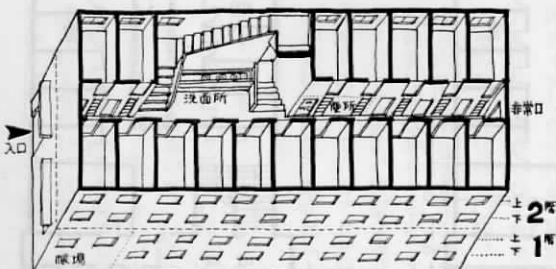


図 36 2段型4階8層の鉄筋ドヤ(山翠園)

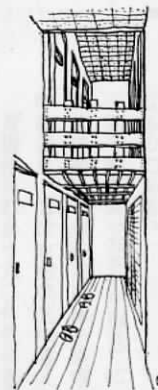


図 34 最大限に空間的につかさねているので、上下入り込んで廊下がみえる(同上)

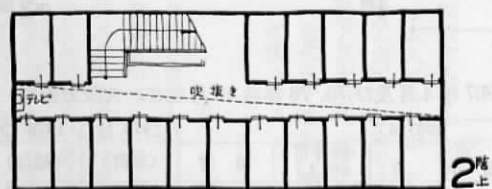


図 35 ドヤの玄関(同上)

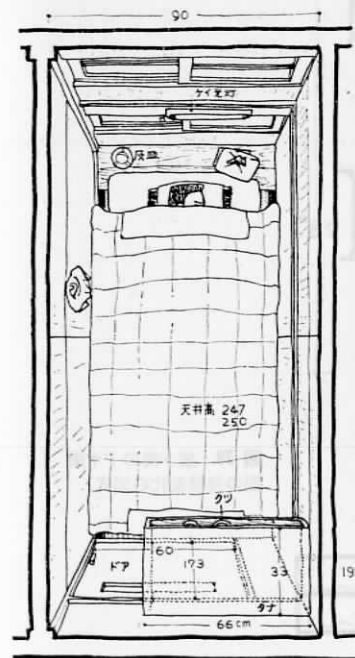
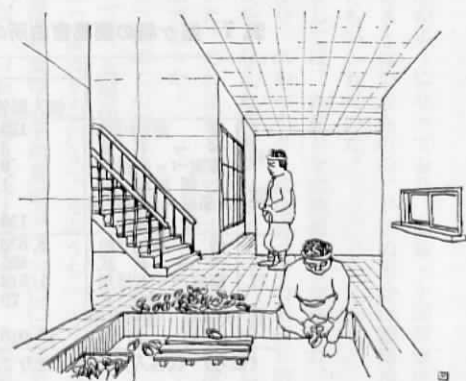
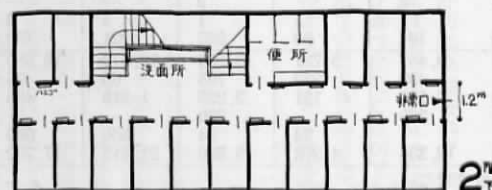


図 32 旧式の2段型を「立てる」部屋に改造した例(釜ヶ崎・福寿園)室内断面(右)もとは2段になって床のあった部分の跡がそのまま壁面に残り、マドももとのままである。上下2室を1室にしたため、天井高がヘヤのスペースにくらべていちじるしく高い。左図は上から見た室内宿泊状況。床面は京間1帖にもみため広さである。なお釜ヶ崎のドヤの見取図は山本康弘君の実測データによる。(高口恭行, 加藤晃規, 山本康弘「ねぐらみてある記・釜崎」、『住宅建設』No. 18, 1969.3 参照)。

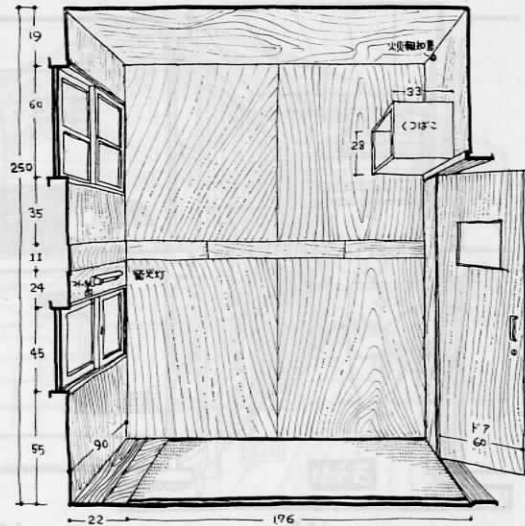


表 6 釜ヶ崎の宿泊所形式 (1967.6)

	許可 無許可		計
	許可	無許可	
個室式	150	19	169
階層式	26	44	70
個室と階層式	4	1	5
大部屋と階層式	2	1	3
計	182	65	247

なりの比重をしめるが、あまり多くはない。それよりもっと個人の空間領域をハッキリさせた個室の方が喜ばれる傾向である。したがって、タナ式の床を幅1m程度にギリギリの大ききで区切るといったものがあらわれてくる。これが(3)の小間式で、その一個当りの大ききは一帖程度のものがあり、二帖に満たないものも多い。ウナギが石がきの穴にもぐりこむようにすべりこんで入るタナ・ハコ式のものもある。しかしこれでは、床の上に坐ることができてもまっすぐには立てない。カイコ棚式では何とか辛棒できたけれど、個々のハコになつてしまつと、もぐりこむような入り方しかできなくなる。プライバシーは確保できても居住性はいちじるしく低下する。

そこでやはり頭がつかえるようなタナ型ないしタナ・ハコ型はきらわれ、立つても頭のつかえない「立てる」個室が求められてくる。そういう要求が強いため、図32のようにハコ・タナ式の中間の床をおとして一部の部屋を「立てる室」に改造したのもあらわれてきたが、ギリギリやと立つて頭がつかえない程度のヘヤをはじめから二段つみかさねて一階とするデラックス・ハコタナ型があらわれてくる。こうなると個室型と全くかわらなくなるが、ただちがうのは天井高が居室の条件をそなえていなくて、ギリギリ立てるだけの高さだけしかない。ただし表向きはそうしたつくり方はゆるされないので、中の床をぬいて一階で届出しておき、あとでこれを上下に区切って二階にする。そのため特に上段の室に入出入りするのは工夫がいる。はじめはかいたナ(ベッド・ハウス)式と同じくハンゴをつけていた。しかし上段を使う人にはハンゴは何といても個室の戸をあけて出入りするのに不便である。よっぽうらつていると事故がよくおこる。そこで非常に簡単な、幅50cmくらいの廊下を上階の片方にくっつけ、向い側のヘヤにも入れるように、この廊下から戸ごとに橋をつける(図38、39)。つまり中二階の廊下に穴があいて一応「中二階」の感じを出しているようなつくり方である。しかし中には更にもう少しぜいたくにして、まん中に吹きぬきをとっているもの(図40、41)もある。こうなると、ただ天井高が低く個室の単位面積が小さいだけで、普通のアパートやホテルとあまりかわらない。かなりデラックスなハコ型となる。

一九六七年の大阪社会学研究会の調査では、表6のように、この(3)小間型が圧倒的であることがわかる。この傾向は、前にみた個室からベッド・ハウス型にかわってきたという山谷の変化傾向と一見矛盾するようであるが、その個室は今までの常識からするとおそろるべき狭小な個室で、ネグラブコ型IIカプセル住宅の見本のよう

表 8 釜ヶ崎のドヤの居住者 (1960年)

	単身者		世帯持		計	
	男	女	男	女		
行商・露店・自営	16	—	6	2	24	
常勤	会社員	46	—	12	—	58
	店員	9	5	2	4	20
トビ・大工・職人	83	1	19	2	105	
日備・人夫	90	2	21	2	115	
芸人・その他	253	—	31	2	286	
無職	47	3	6	5	61	
計	34	8	9	91	142	
計	578	19	106	108	811	

	世帯主の比率		年齢	%
	世帯持	単身		
男	13.5	61.0%	子ども	8.8
女	16.8	8.7%	青少年	4.4
計	30.3	69.7%	20歳代	24.0
			30~50代	59.0
			老人	3.8

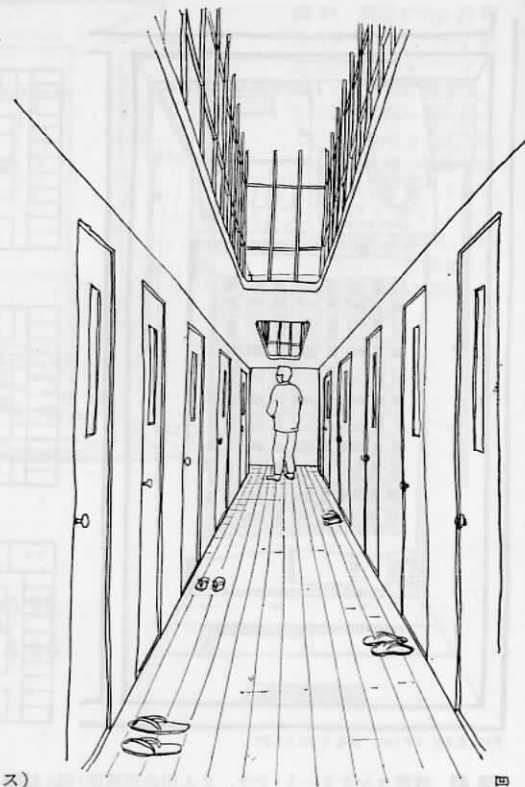


図 41 吹抜き廊下の見取り図 (パレス)

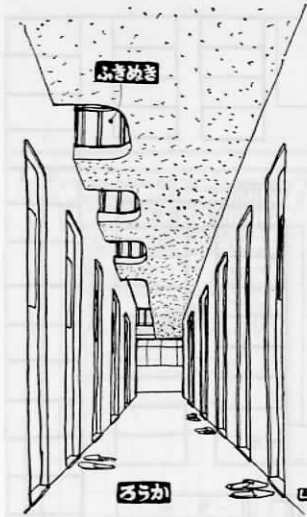


図 39 同右、穴あき廊下の見取り図

図 38 中2段、穴あき廊下型の例 (3階6層のSホテル) 平面

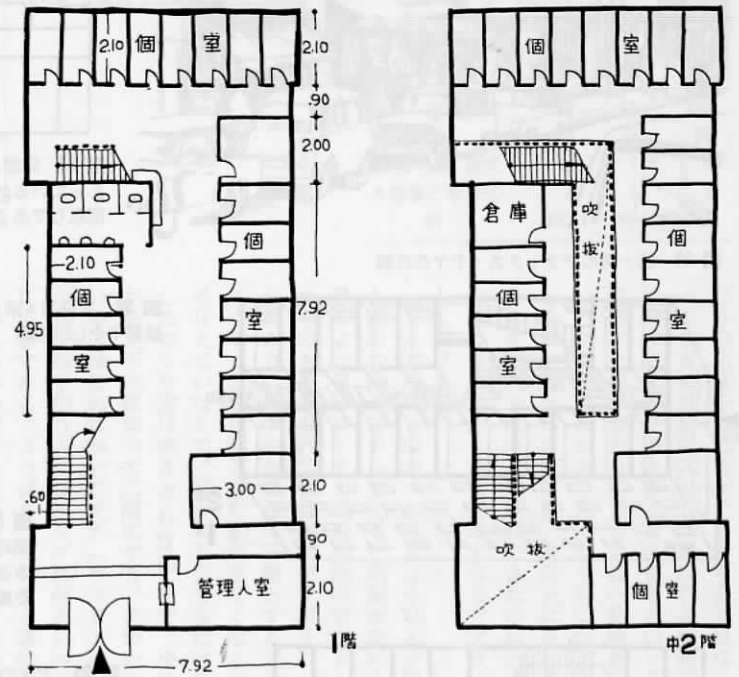
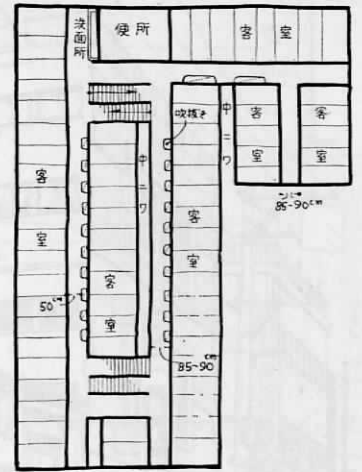


図 40 吹抜をまん中につけた2段型ドヤ・山光 (個室190円, 1968年)

表 7 釜ヶ崎の簡易宿泊所の実態 (1967年4月及び70, 78年各12月現在, 大阪府警調)

件数	項目	1967.4			無許可(個人)	総計	1970.12	1978.12
		個人経営	会社組織	可小計			(総計)	(総計)
件数	個室(小間)	125	21	146	51	197	203	182
	ベッド式併用	3	—	3	4	7	1	1
	大部屋(追込)	9	4	13	3	16	13	6
	大部屋・個室併用	1	1	2	—	2	—	—
計	138	26	164	1	1	4	3	
収容人員	個室(小間)	8,833	634	9,467	3,787	13,254	19,679	16,560
	ベッド式併用	495	—	495	270	765	65	76
	大部屋(追込)	1,512	590	2,102	121	2,223	1,219	466
	大部屋・個室併用	70	200	270	—	270	—	—
計	10,910	1,424	12,334	4,202	16,536	21,613	17,792	

(備考) 収容人員は収容能力で、実宿泊人員ではない。

なものである。

別の調査(一九六七年四月)によると表7のようになっており、個室・小間型が圧倒的に多い。無許可は年々整理されつつあるとはいふものの、ドヤの半分は建築基準法違反、 $\frac{1}{4}$ は旅館業法に違反しているともいわれた。

万国博にむかう六〇年代の末期の傾向としては、鉄筋ドヤの設備競争がみられ、「完全浴房」「完全個室」がうたい文句になり、エレベーターに浴房付きの鉄筋五階建、四〇〇人以上も収容し、カラーテレビをそなえた高級マンモス・ドヤが出現したし、三ないし五階建のものが急増していた。これに対して古い木造二階建て程度

のものは改築がおこなわれてやや減少気味であった。六八年八月の調べで、愛隣地区一三町、六二haのこの地区の宿泊施設は旅館五一、簡易宿二二八(うち鉄筋六一)、アパート三一七、共同住宅八〇、バラック二四一、登録・無登録をあわせて四・五万人が住み(一ha当り七三〇人)、そのうち一・八万人の日傭労働者がドヤ住まいとみられた。宿泊料金は、平均賃銀が一、三〇〇円であった六七年ごろ、個室三帖(一〇〇〜四〇〇円)、ベッド式(八〇〜二〇〇円)、大部屋(八〇〜一〇〇円)であったものが、やや上昇気味になり、賃銀も年に二〇〇〜三〇〇円アップしたけれど、一泊三〇〇〜四〇〇円をとるドヤがふえ、六〇〇円の個室も六八年にはあらわれてきた。

その後の変化を七〇年、七八年の調査でみると(表7)、無許可は整理され、七〇年には六七軒(収容能力七、〇五九人)にふえていたが、七八年には全くなかった。宿泊室の形式からみると、大部屋(追込み式)の宿泊所は客をひきつけることができなくなつて消え、個室小間型が軒数でも(七八年、九五%)、収容人員でも(九三%)、支配的になっている。ドヤは完全に「近代化」され、蜂の巣のように小さな寝床空間を立体的に積みあげた「人間倉庫」に変わった。

ドヤモン

こうしたドヤにすむ住人「ドヤモン」はさきにも述べたとおり、ほとんどが単身者である。少し古いが一九六〇年の調査を示すと、表8のようになる。この表ではまだ自営行商・芸人といった伝統的なスラム街の居住者がかなりいるが、注目されることは男の一人ものが七〇%もあることである。男は女の三倍、男の二割が世帯持ちにすぎない。反対に女の七割、つまり女は大部分世帯持ちとして住んでいる。しかし世帯持ちの二割は欠損家族で子供づれは一割、その場合も継父母が多く、子

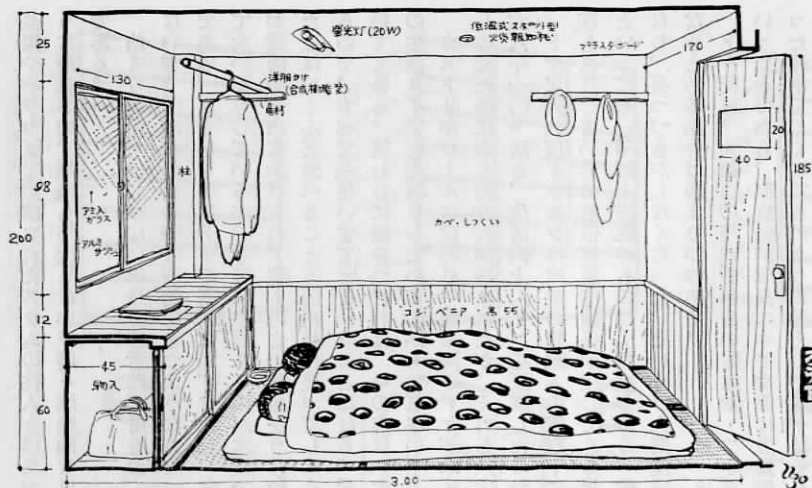


図44 鉄筋ドヤの相部屋の例(三次ホテル)。鉄筋5階建、エレベーターは1, 3, 5階に停まる。宿泊賃・200~350円まで。5階からさらに1階上った3帖敷の616号室・約3帖敷、敷フツン2, 上ブツン1, 枕2, シーツは洗濯されている。350円。風呂は一日置きにたてる。(1968.12調)

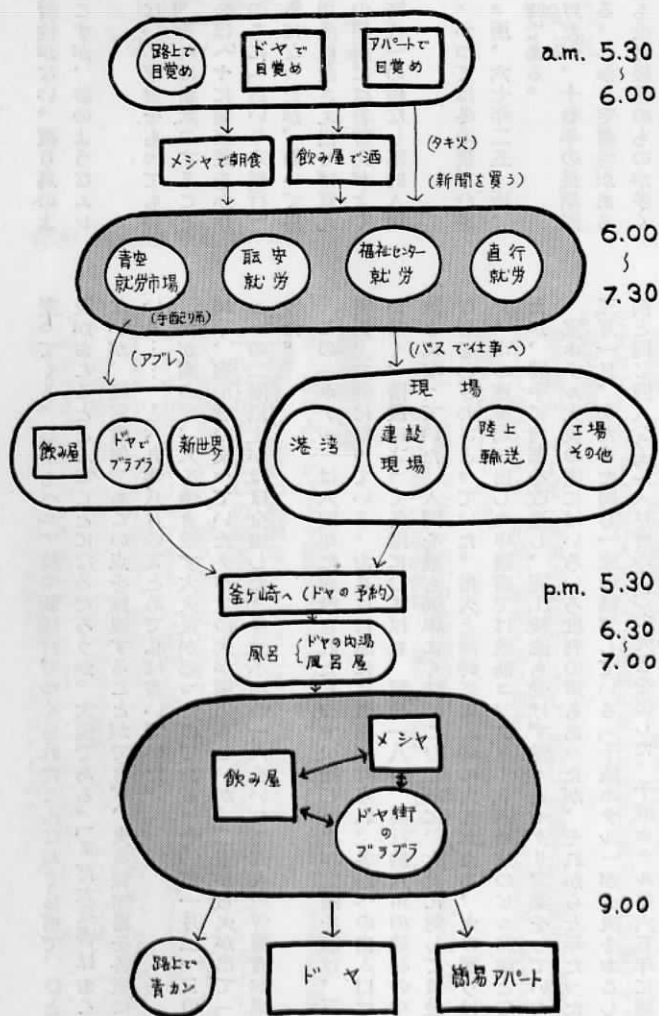


図45 ドヤ街の住人の生活時間の流れ、上から下まで一日。

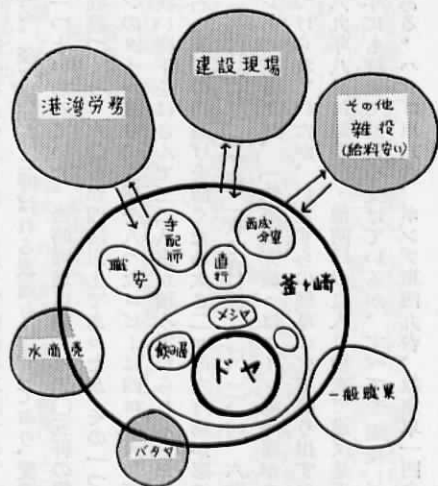


図46 蒼ヶ崎のドヤモンの生活圏

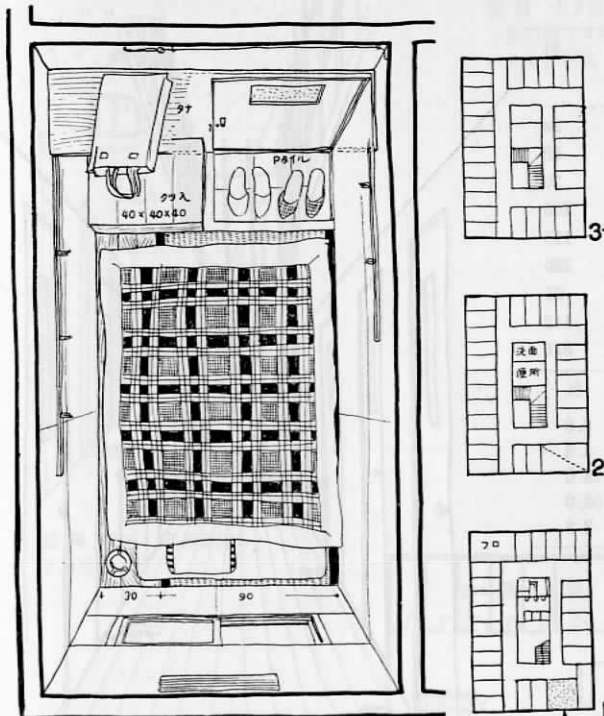


図43 鉄筋コンクリート・ドヤ, 2人用の相部屋(都, 1968.12調, 1帖半弱 250円)

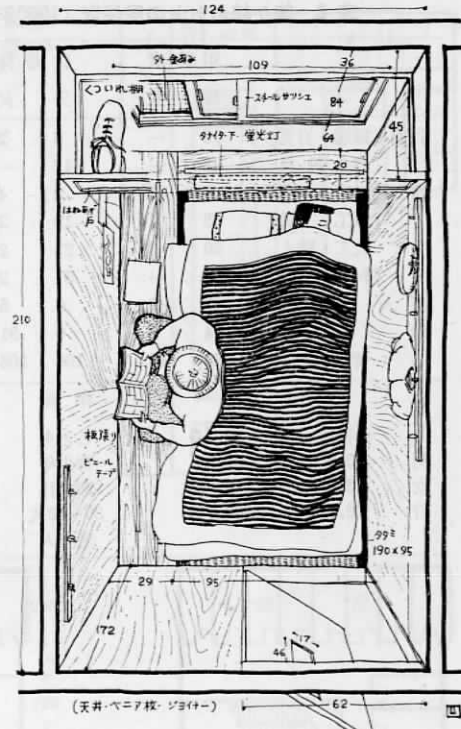


図42 パレス室内(個室170円)

供の半分以上は未就学または不就学、子供中心の家族ではなくて子供は「邪魔もの扱い」になっている。ドヤは家庭生活の容器でないことをもがたがる。子供はだから早くから家庭を飛び出し、年齢構成は三〇〜五〇歳代が六割で、青少年は少ない。老人は男やもめが多い。しかし老人は次第に減り、二〇歳代がふえていた。外国人は少ない。ドヤとはほとんどかわらぬ日家賃のアパートやブラック住宅の住人もいるが、このドヤモンこそは釜ヶ崎を形成している典型的な階層であり、この地区の住人の性格を代表している。

その生活の時間的なパターンは、六八年末から六九年一月にかけてここに住みついて調査した京大生・山本康弘君らの研究(多くのスケッチ図面の資料も同君らによる)によれば、図45のような形になる。

ドヤモンは、夕方五時ごろになるとボツボツ、ドヤにやって来る。帳場で宿賃をはらい宿を予約する。七時ごろになると満員になる所もあるから、宵の口に金を出してヘヤをとっておくのがコツである。ドヤのフロまたは公衆浴場で入浴をすませ、ノミヤまたはメシヤで夕食をとる。六八年夏の調査では、この界限に立ちノミヤや一三六、酒屋三六、喫茶店八九、めしや一〇八、すしや二三、お好み焼屋二二、ホルモン屋二二、中華店八、パチンコ店一一、マジシャン二六、スマートボール二、ゼットゲーム二、小料理店など九九となっていた。

九時から一〇時ごろになるとドヤに帰って来る。ヘヤといっても音はつつめけである。一時ごろになると少し静かになるが、呼びだしのマイクが時々なる。

朝五時半になると目をさます。大小のバスが青空労働市場に集まっている。元請・下請、作業場、作業内容、労働時間、賃銀を書き入れたビラが車体にベタリ。メシヤで朝食をすませ、青空市場・職安などで仕事をみつけるために人びとは集まる。老人などは職安で安い賃銀の軽労働にありつく。ヤミ手配師の方はピンハネがあっても、賃銀はよい話は早い。職安グループ(失対・民間・港灣登録など)四、〇〇〇人、労働センター六、〇〇〇人、手配師・直行など五、〇〇〇人。午前八時、バスはあらかたなくなる。仕事にありついたものはバスで仕事場へ。アブレると一日を何とかすごさねばならない。

ドヤ・簡易アパート・ブラック・メシヤ・ノミヤ・質屋……そして彼らがこのドヤ街から外側にはき出されていく窓口となる労働市場や職安……といったもので、都会の盛り場に近接している釜ヶ崎の空間はつくられている。それらは彼らの生活基地なのであるが、単身者に代表されるドヤモンは、人びとが住みついている棟割

長屋やバラックで形成されたスラムの住人とはちがって定着性がない。渡り鳥のような身軽さで、組織も集団もない。時々爆発的な暴動をおこすが、砂のようなムレである。

泊まり場所だけしかない単身労働者は家財をおく場所もないし家財をもっていないが、同時に外出の時に荷物をもつようなことはしない。それは新米のすることである。大きなものはドヤの番人にあずけたり、常宿の場合はへやに南京錠をかけておいたりしているが、身軽に生活するのが本領である。のちに「あいりん銀行」が愛隣会館内に設けられ、夜七時まで貯金をうけつけるようになったが、働いて得た金はほとんど食べることに消費品に使ってしまう。生活用品は金さえ出せば買えるので、すべて「使いすて」ということになる。愛隣会館の便所には着替えがよく捨ててある。貧しさに眼をつむれば、その点は「大量消費時代」の根なし草的人間の生活タイプを先取りしているのかもしれない。

カストリがビールに変わり、暖冷房のドヤがふえてきた。かつては冬の夜ぎむをしのぐためによくなき火がみられたが、それも六六年四〇カ所、六七年二五カ所、六八年一〇カ所と、生活上(？)を反映したのか減少気味である。

ドヤに入ればドヤモンは旅館の管理人の管理下に入るわけだが、十数年の長期滞在もあり、古い形の疑似家族的関係が生じてくる場合もある。しかし定着性があるといっても一年以上滞在のものはい程度である。管理人側も会社経営のものが多くなり、長つづきがなくなった、という。人間関係からみても渡り鳥のものをとなぎとめる条件は弱まりつつある。

ドヤ火災

何といっても、このような向うみずに成長した「ねぐらずまい」で危険なのは「火災」である。大阪府警の調査では、火災の発生は六七年二二件、六八年二〇件、七〇年一〇件、七八年一四件といった程度である。昔のスラム地区では、狭い所に混みあって生活している割りに火災は少ない。人目が多くて監視がゆきとどいているからだといわれていた。しかし、「個室化」がすすむと、その条件はガラリと

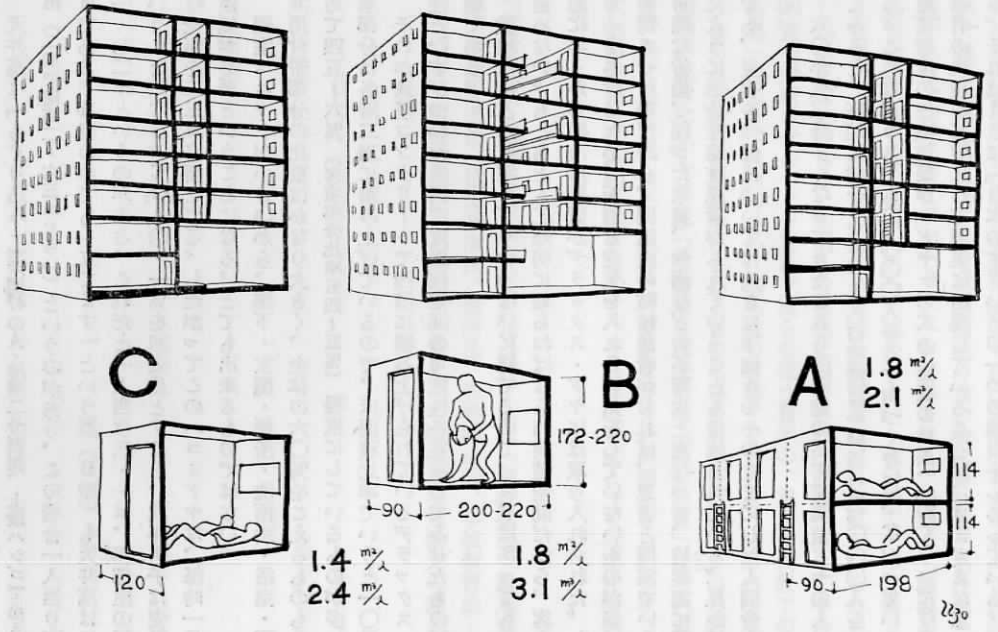


図 47 超高密度居住空間の集積

変ってくる。しかもベニア板や新建材でつくられたこんなねぐら宿で、ひとたび火災がおこるとどんなことになるだろうか。大変である。「まだ大災害はおこっていないが、経営者側でもこの点を無視することができず、火災報知器を各室につけている……」と六九年八月のまとめで私は書いていた。

だが案の定、人を焼き殺す大火災が起ったのである。七〇年一月三十一日の夕方七時半、宿泊者の使っていたタバコの火が原因らしいが、二階から火が出て、「宝ホテル」の二階以上がほぼ全焼した。身元不明の一人をいれて四人の労働者が犠牲になった。

この「ホテル」は六四年に建設されたもので、階ごとに中二階を設け、三階建が実質上六階になっている。おまけに窓には鉄網がはられ、各階への出入口は一つしかなく、階段によって各階にむすばれ、幅約一八m、奥行約八mの建物の中央が吹抜きになっていた。人間を最も効率よく詰めこむために、火災に対しては最も危険な形をわざわざとっていた。出火と同時にまん中に火柱がたち、火の廻りは早かった。市の建築局に出した申請書では鉄筋コンクリート四階建のビル旅館となっていたが、勝手に内部を改造し、完工検査も受けず堂々とモグリ営業をしていた。

宝ホテル火災の際にはいろいろ批判の声もあったが、それから五年たった七五年三月一日、またまた同じ一家の経営している「千成ホテル」が火災をおこし、五年前と同じ四人(うち一人は身元不明)の死者を出した。千成ホテルは六五年に建設された鉄骨鉄骨四階建で、総面積八〇三㎡余、しかし実際は中二階つきで七階建、一、三、七の建物である。釜ヶ崎銀座と呼ばれる表通りに面しており、愛隣地区では「近代的」ホテルの一つといわれていた。当時同地区内には二〇五軒の簡易宿泊所の半分近い九二軒が鉄筋づくり、六〇軒が四階以上であったが、その一つである。外装はブルーとグリーンのタイル張り、玄関を入ったロビーは四mの天井高。しかし中は幅六〇cmの暗く狭い廊下をはさんで三二八室が積み重ねられ(うち三〇五室は蒲団一枚しか敷けぬ)、投石と蒲団の持逃げを防ぐため太さ二mmの六角網が窓に張られていたが、「完全個室」の間仕切りはベニア板一枚で音は筒抜け、二、四、六階は水まじ板張床で洗面・トイレも奇数階だけ、「炊事場完備」はコイン湯沸器があるだけで、自動火災報知器はつけられていたが、いたずらの煙草の火で鳴り出すのでスイッチは切ってあった。六九年八月に建築局・消防局の立入り検査で違反是正の勧告を受け、七一年・七四年にも検査で勧告を受けているが、すべてを無視しつづけた。その結果の災害である。ハシゴ車六台、ポンプ車四九台、救急車一四台、消防

隊員二七三人、西成署から警官二五人が出動し、火の海になった建物からハシゴ車で二五人を救出したが、四人の死者、重傷二人、重軽傷五九人を出した。おこるべくしておこった災害である。

『釜ヶ崎通信』は「五年前もこんな不法建築、うかばれぬホトケたち、焼け死んだ仲間たちに代って」と題して、千成火事のいきさつを調べ、ガメツいドヤ商法と、それを許している当局の手ぬるさをきびしく批判している。そして、ドヤに泊まるときの心得として、

- 「その一、できるだけ山田一族(二度事故を起した経営者)のドヤをさけること(二度あることは三度ある)。
 - その二、できるだけ二階以上の部屋はやめること。
 - その三、高い階の部屋しかあいてない時は、カッター(金網切断用)とロープ(避難用)を用意すること。
 - その四、右の三つの注意を守れない人は、青カンすること……」
- 釜ヶ崎は、それを「景気の調節弁」とし、波打つ労働力の需要を労働者の負担で解決してきた資本の、危険で極端に非人間的な労働力の集積装置であることをますます明らかにしている。

(1) 「金網の内と外・あいりん宿泊所火災から」、『朝日新聞』一九七五・三・一一。
 (2) 寺島雄雄編『労働者渡世——釜ヶ崎通信』一九七六・八。

超高密度住宅

釜ヶ崎にみられるドヤ建築は、プライベートな寝室(個室)を最高限度に集積した「ねぐら」建築の特異なタイプとして注目に値する。
 一九七九年のECの秘密文書に、日本人はウサギ小屋に住んでいるという記述があり、注目をひいた。耐久性のない狭い住宅に押しあって住み、「働き中毒」になっている状況をユーモアをもって表現した的確な指摘とも受けとれるが、ここに展開するドヤはウサギ小屋以下、畜舎以下といえるかもしれない。その個室の大きさは、内法幅で九〇cm長さは二m足らずのものが多。二mとしても、一人当り一・八mである。相部屋の場合は幅一・二〜一・二五m程度となり、奥行二・二mとしても、二人入ると一人当り床面積は一・四㎡にも満たない。

天井高は「もぐり込み」型(図47のA階層二分劃型、上段ハシゴで出入り)で一・一四m(二層で階高二・六五mぐらい)というのがあり、この場合一人当り容積は二・〇五㎡である。部屋の中でも「立てます」という型(B型)も天井高は二m足らずで、一・七二mというのがある。これだと一人当り三・一㎡、相部屋の場合二・四㎡ということになる。CO₂〇・一%を限度量とすると、成年男子は安静時に毎時新鮮な空気を三三㎡必要とする。したがってこのハコドヤは、毎時一〇乃至一四回の換気が必要ということになる。とても出来るものではない。

個室ユニットが小さいから、廊下・玄関・便所・洗面所・浴室・管理人室などの共用付帯部分の比重はかなり大きく、全体の六〇%をこえるものもあるが、きりつめて四五〜六%(客室部分比率五四・五%)程度にしているものが多い。ただし、客室部分は各階二層に積み上げられているので、床面積比率でいうと一〇〇%をこえる。それが鉄筋コンクリートで四階に積み上げられているデラックス・ドヤは、営利性とむすびついた超高密度居住空間の可能性を演習してみせたもので、ある種の偉観である。

敷地はほとんどギリギリいっぱい建てるので、マドはあってもあまり開放性は望めない。もともと人工照明に頼らねばならぬ集積空間だから、客を引きつけるために早くから暖冷房装置がデラックス・ドヤには取り入れられた。しかしその効率(?)をあげるため、新鮮な空気を入れる換気をしていないものが多い。同じ空気を循環させるのだから、開放性の結核患者がおれば、患者と同室でいるのと同じで、苛酷な労働、偏った栄養、飲酒などの不衛生と重なって、培養室に菌をほうりこんだように感染性結核患者がふえていることも指摘されている。見かけは立派なドヤでも、災害や保健については大きな手抜きをそのままにした人間倉庫の高密度化である。

六〇年代以降多くなってきたこれら四階建の高密度集積ドヤの人口密度を推算してみると、宅地に対するネット人口密度は一ha当り三、〇〇〇人をゆうに超している。これはグロスでも二、〇〇〇人をこす町づくりにながっている。このような超高密度の住宅建築が「ドヤ」形式の発展の結果、「ねぐら」だけを求める単身労働者の集積を基盤にして現実に出現していることは、さまざまな意味で注目に値する。それはまさに「日本のすまい」の一つの極限をしめしている。

- (1)「ECC委の秘密文書『日本』」、『世界週報』一九七四・四・二四。
- (2)「釜ヶ崎むしむ悪性結核、菌培養する鉄筋旅館」、『朝日新聞』一九六八・六・二〇。

汚れ仕事にまわされ、他の労働者からも蔑視される。劣悪な環境、重労働、中間搾取ですりへった収入は最低限の衣食住を賄うことで消えさり、全くのその日暮らして社会保障は一切なく、事故は涙金で自己負担、アルコールや売血で健康をそこない、果ては精神病患者として悪徳病院の食い物にされる。不合理・無法に対して反抗すれば、「騒ぐと仕事がへる」とおどかされる。無契約・無権利、無保障の低賃金労働者の彼らは、資本にとって都合のよい「使い捨て」の労働力である。

大企業、下請、手配師、旅館や食堂の経営者などに搾取されるために生きているとしか思えない彼らは、差別と劣等感に悩まされ、どこへもってゆきようもない欲求不満を鬱積させる。ドヤ街は、彼らを使う資本の、東京や大阪での大規模な「共同飯場」であり、経費のからかぬ「通い飯場」でもある。抑圧されている彼らドヤモンよりも、彼らを傷めつけているものに肩をもつ警察は、この共同飯場をかばう暴力団のように見える。かつて僻地に存在した「監獄部屋」は、いま大都市に所を變え、目に見えない格子と棍棒で、ガンジガラメに彼らをしめつけている。それへの不満が爆発的な騒動をひきおこす。それは彼らにとって人間性回復の行動ともいえる。

「無法地帯」の無法は、彼らのそれではなくて、「建設業法、職業安定法、労働基準法、道路交通法、建築基準法、消防法、売春防止法、学校教育法……」などを無視して、ヤミ労働市場を「必需品」と考え、このような労働力の非人間的貯水池を

無法地帯

山谷は一九六〇年七月から八月にかけて大きな騒動を起こしたが、五九年一〇月以来、六二年一月、六四年六月、八月、六六年八月から九月へ、六七年八月、六八年六月というふうに、年中行事のような騒動が繰り返された。釜ヶ崎でも六一年八月の騒動以後、六五年三月、六七年五月、六月、六九年四月というふうに、時に三千人が加わる騒動がおこっている。攻撃の目標はたいは権力の象徴ともいいうべきマンション交番や警察署である。石が投げられ、路上の自動車や焼打ちにあう。ドヤ街は、理解しがたい騒ぎをおこす無法者がうろついている。「無法地帯」であるかのよう報道がおこなわれ、人びとに誤解されている。しかし警察におしかける彼らは果たして無法者なのだろうか。

ドヤ街の居住者の中核をなしているものは、ドヤに住む単身労働者であることはすでに見た。彼らがこうした事件の主役である。

戦後の産業構造の変化、農村の崩壊等で定住の場を失い、居住地から追い出されてきた彼らは、職を求めてここに流れ込んできたのである。彼らを求めているのは建設業はじめ、港湾、運輸、雑多な製造業などの資本である。資本は労働者を雇い入れる「負担」をさけ、利潤をあげるため、必要とする時期だけ労働力を駆り集める。彼らは、これらの資本が求める必需品である。彼らは日傭いあるいは臨時の労働者として、概して低賃銀の正規ルートではなく、職業安定法や建設業法の網の目をくぐるヤミ労働市場を通して、親企業が求める労務を供給する下請業者の手配師によってかきあつめられる。

その日その日の職を求め労働者たちは、手配師や彼らを使う下請業者に大きく賃銀をピンハネされ、わずかの手取りしかない。仕事を終えた彼ら待っているのは、食堂・飲み屋・遊戯場・ドヤなどである。体が資本の彼らは栄養を求めねばならないから食事の金づかいは荒い。家庭もなく、将来の生活に明るい展望ももてない彼らを慰めてくれるものはアルコールしかない。飲めばはずむ。こうして彼らの得た僅かの収入の大部分は食費とドヤ代、ギリギリの生活資料の購入につかわれ、残るものは殆どない。もし仕事にあぶれるとたちまち干上り、野宿(青カン)はさげられない。体を食う売血でしのぐ者もでてくる。

定住の場もなく家庭もない彼らは、ドヤモンとして特別の目でみられる。ねじり鉢巻にジャンパー・地下たびの一見土方風の彼らは、仕事場では人の嫌う重労働や

つくり温存させている大企業、下請業者、暴力手配師、さらにこの不法を見過ごして裏から支えている警察署、労働基準監督署、教育委員会などの公権力であり、さらにその背後でこの状況を利用して自民党政府、大資本の支配している資本主義体制であるといえよう。それが法治国で法の支配の及ばぬ「無法地帯」をつくりだしていると神崎清氏は指摘している。

底辺労働者としてドヤモンの持っているエネルギーは大きい。彼らは彼らをガンジガラメにしているものへの直観的な認識から、ほこ先を警察などに向ける。しかし彼らを食い物にしているヤミ手配師や暴力組織、それを手先につかい、これに乗っかかっている資本主義体制への組織的な反撃を効果的に展開するまでにはいたっていない。それは更に広い労働者・農民との連帯を必要としよう。

確かに最低極限にまで切りつめられた危険極まる人間集積空間におしこめられた人間が、むし暑い夏の季節に暴発するという説明は可能である。しかしそれだけのことではない。むし暑さは冷房装置でしのげる。ドヤの「近代化」はなお進むであろう。しかしこのような人間集積空間の存在は、それを造り出しているカラクリと共に、現在の支配権力の「無法ぶり」を示すものである。昔はスラム街に資本主義の恥部をみた。今それは、ドヤ街のこの人間集積空間に、その一つのピークを見よう。

- (1)元請けで四千円の日当が、下請、孫請、人夫出し、手配師のルートを通ることで、二二〇〇円にへる「釜ヶ崎ーあいらん、この十年」、『毎日新聞』一九七二・八・六。
- (2)神崎清『山谷ドヤ街』、一九七四・六。